

23. 大阪版農産物トレーサビリティシステムの開発と普及

○湯ノ谷彰・福田 渉・竹田裕紀*・新田 仁* (*産業技術研究所)・晒 一浩**
西濱絢子** (**農政室)・谷川典宏 (病虫害防除所)・上田昌弘 (北部農と緑)

1. 目的

農産物の安全・安心のためには、農薬散布などの生産履歴の記帳および、その確認が必須である。記帳は主に紙を用いた手作業で行われており、その確認には膨大な事務量を要する。さらに、大阪府では独自に農薬などの基準を定めた「大阪エコ農産物（以下、エコ）」の認証を行っており、エコの計画および実績の確認にも膨大な事務量を要する。これらの迅速かつ正確な確認には、農薬の使用基準や大阪独自の基準などの情報をデータベースに整理した大阪版農産物トレーサビリティシステム（以下、システム）の開発・普及が不可欠である。大阪府では平成16年度から府立産業技術総合研究所（以下、産技研）を中心にシステムを開発してきた。しかし、農薬に係る情報が整理されていないこと、また、操作性が容易ではないこともあって、あまり普及していない。そこで、情報を整理し操作性を向上させることにより、システムの普及を行う。

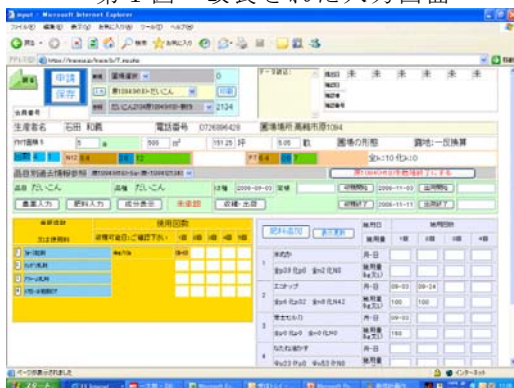
2. 方法

システムを用いて、擬似的に履歴の入力を行い、操作性向上のための改良点などについて産技研に指摘を行った。さらに、各地域農と緑の総合事務所 農の普及課が調査したモニターの意見を整理・集約し、その結果を産技研に要請した（第1図）。また、独立行政法人 中央農業総合研究センターなどで農薬使用基準のデータベースへの整理方法についての調査を行うなどして、データベースを整理した。次に、市町村エコ協議会や農業協同組合（以下、農協）などの生産履歴確認者を対象に入力・確認、エコの申請・報告方法などについての講習会を行い、システムの普及を図った。加えて、農産物生産者などの履歴入力者を対象に入力や確認方法についての講習会を行い、普及を図った（第2図）。

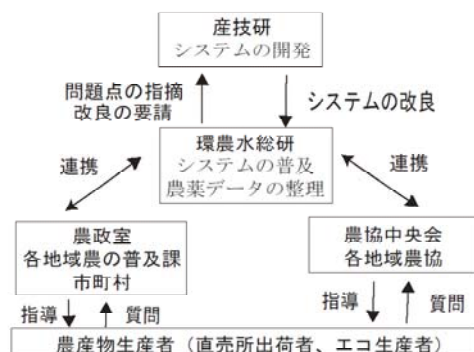
3. 結果および考察

のべ35市町村、9農協の計78名に対しシステムの使用方法についての講習会を行った。その結果、430名（2月29日現在、確認者を含む）が登録・使用した。使用者からは操作性が向上した、農薬の確認作業が楽になった、エコの申請・報告が省力的にできると喜ばれた。このシステムは入力を受け、データを蓄積することにより、過去の栽培記録を参考にするなどして、さらに入力が省力化できるので、今後は使用の継続に向け、さらなる操作性の向上のための支援を行う。また、現在、主に確認者が代行で行っている履歴の入力を生産者自らが入力・確認するために生産者を対象とした講習会を関係機関と連携して行う。最終的には、システムで蓄積した情報を公開することによって、消費者の大阪産農産物に対する食の安全・安心の信頼を得る。

第1図 改良された入力画面



第2図 役割分担



大阪版農産物トレーサビリティシステムの開発と普及



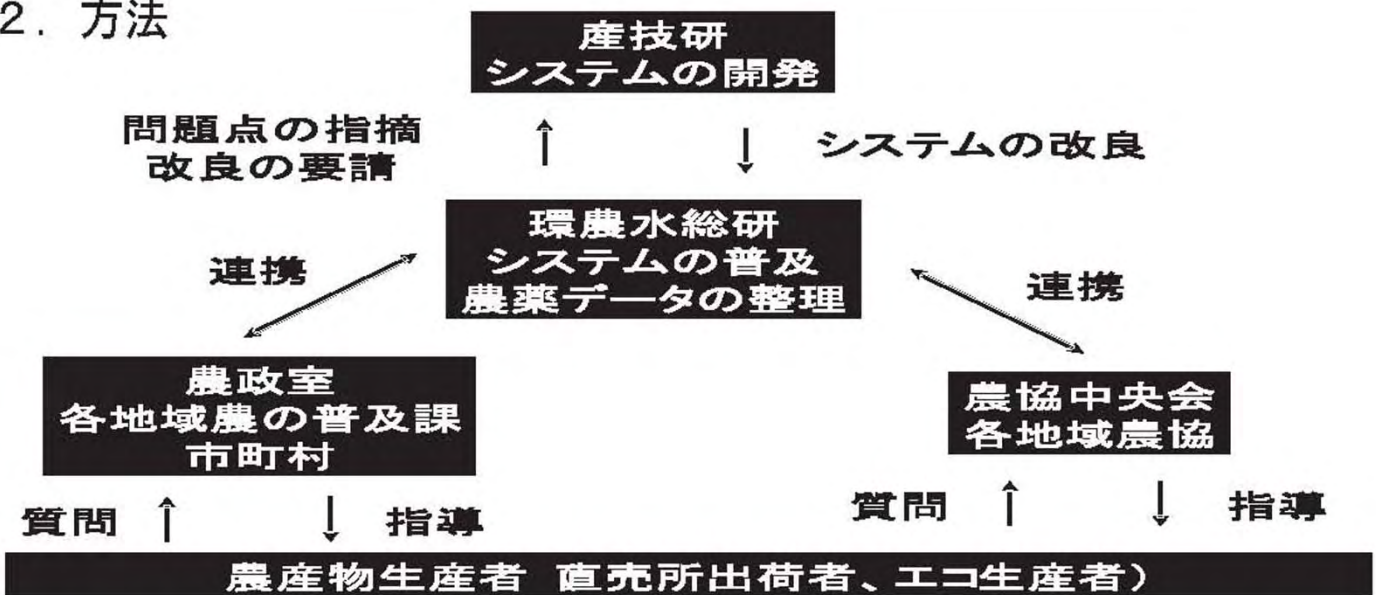
湯ノ谷彰・福田 渉・竹田裕紀※・新田 仁※（※産技研）・晒 一浩※※
西濱絢子※※（※※農政室）・谷川典宏（防除所）・上田昌弘（北部農と緑）

1. 目的

農産物の安全・安心



2. 方法



農薬登録の確認

農薬登録の確認画面

①成分表示をクリックします。背景色が青です。これは成分の上限に達していない事を示します

②背景色が赤色です。これは成分の上限に達した事を示します

③背景色が黄色です。これは成分の上限に達した事を示します

④背景色が赤色です。これは成分の上限に達した事を示します

日付の色について
青色 収穫開始時期を考慮した場合、不散布時季等は、適正であることを示します
黄色 状況により、散布時期が高くなる場合を示します。個別確認してください。
赤色 散布後の収穫が早すぎます。

農薬名の背景色について
青色 収穫性濃度で散布されています。
黄色 状況により、散布濃度が高くなる場合を示します。個別確認してください。特に、不農作物は出荷することができません。
灰色 農薬の情報を確認できないか、失効している可能性があります。

3. 結果・考察、今後の展開

- ・操作性の向上
- ・確認作業の業務量軽減
- ・エコ申請・報告の省力化

使用の継続
生産者が自ら入力

大阪産農産物の安全・安心

大阪府 環境農林水産総合研究所
Research Institute of Environment, Agriculture and Fisheries, Osaka Prefectural Government